

山本健吉俳句読本

角川文化振興財団編

第五卷

俳句の周辺

角川書店

本健吉俳句読本

五卷

句の周辺

角川書店



山本健吉俳句読本 第五卷

俳句の周辺

平成六年一月二十日 初版発行

著者 山本健吉

発行者 角川歴彦

発行所 株式会社角川書店

〒100-1 東京都千代田区富士見1-13-3

☎ (03) 381-7185 (営業)

(03) 381-7185 (編集)

振替 東京31-195208

印刷所 晩印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

© Printed in Japan ISBN4-04-850905-5 C0395

目次

I

「批評」編輯後記	10
法隆寺	28
石田波郷君の応召を送る文	38
堀田善衛君の応召を送る序	47

II

桔梗五郎を祭る文	56
連衆について——波郷氏への手紙	61
タッチの差——波郷君への手紙	67
秋の蔭・冬の溝	76
方法論と歴史的意識——『慶大俳句百人集』跋	80

詩の自覚の歴史

84

III

蛇笏翁の逝去

104

物のあはれ

106

雑煮

108

赤富士

110

原城址の赤のまま

113

歳時記のすすめ

116

遊糸繚乱

118

「縁」の思想

123

花吹雪

127

酒田の落日

130

自然と藝術

134

アニミスト?

138

私の住んでみたい町……………143

父の五十回忌……………146

莊嚴な回答……………149

一期一会、一座建立、独座観念……………151

天際の借景……………156

IV

拒み通す心……………160

わが俳話……………165

箒木の影……………165

一期一会……………167

新季題いろいろ……………169

三好達治の「雪」の詩……………171

西行、芭蕉、「命二ツ」……………173

思い出の俳人たち……………177

短歌　その器を充たすもの——迢空晩年の歌論	181
賤ヶ岳遺聞	198
鑑真和上に遭う	202

V

刻意と卒意——佐理の書跡について	210
秋声賦	214
自然と「ひづみ」	217
白髪の時如何に	221
「歴史」の一語——小林秀雄氏と私	223
死仕度	229
老眼愁看	232
ふるさとの文学碑——舟越保武氏のこと	234
夢のあと——わが文学の夜明け	238
如泥人考	247

山中人考……………253

地上一寸の生……………258

『百扇帖』の雅と俳と……………262

雪月花の時……………266

VI

対談・座談 語録抄……………274

解説 川崎展宏……………289

解題……………298

山本健吉年譜……………302

山本健吉主要著作目録……………327

俳句の周辺

山本健吉俳句読本
第五卷

I

「批評」編輯後記

ともかくも創刊号を送ることが出来たのを歎びたい。僕らの抱負に較べて、出来栄えはとなると、いろいろ言いたいことも出て来るが、少くとも、現在の日本文化が一番求めているのは、こういう雑誌であると思う。単に発表機関を持つというだけなら、同人の多くは外にお座敷がなくはないのだし、新しい雑誌を発刊する意義はないのだ。雑誌の意義と使命については、追々見て貰うより外に手はないが、この小雑誌が何時かは文学史上にはつきりと足跡を印するものだという信念だけは、ここに申し述べて置きたいと思う。

河上さんが「この雑誌は長篇主義で行くんですな」と言った。その為でもないが、期せずして連載ものが多くなったことは、一面僕らの批評に対する覚悟を物語るものだ。西村君のものは恐ろしく雄大な規模のものだし、「作家論」三篇も枚数に制限を受けないでのびのびと書いている。寺岡君の時評は三箇月続けて貰う心算だ。批評を中心にして編輯して行くが、批評というものを非常に自由にまた広汎に考えている僕らは、今後あらゆる批評のジャンルを駆使して、変化の多様さを示す考えである。小林さんが僕らの座談会に快く出席して下さったことは感謝に堪えない。氏のドストエフスキ研

究は、日本の近代批評の歴史の上に、一つの大きな里程標を打樹^{うちた}てたものだ。従つて座談会も、時のトピックとして、この本を中心にいろいろ小林さんの意見をたたいた。毎号どなたかに来て頂いて話を聴く計画を持っている。

雑誌は市場へは殆んど出さないし、又広告もしない。直接予約申込みして下されば幸甚である。

(一九三九・八)

*

「第二号はまだですか？」と逢う人毎に言われた。まるで挨拶代りの言葉のように――。だが遅刊の責を負っている私の方では、この軽い意味で言われた言葉も、軽くは響かなかったのだ。催促の言葉は結局支持の言葉だからである。創刊号を送るや、方々から――それこそ思わざる僻地からも――激励鼓舞の言葉を寄せられたのだった。御覽の通り、全く地味な、人目に立つことを恐れているかのようなうそ寒い外容を取っているので、そのような反響は予期していないところであつた。

それと共に時々、心なき誹謗の言葉も耳に入つたことを素直に申し上げよう。但しそれが、我々が誹謗をこそ望む方面の人たちからの言であつたことは望外の倖せであつた。思うに僕らが現在批評の純粹さ、健康さを守り育てて行くには一しお困難な時期であり、そのためにはいろんな抜き難い偏見や泡沫のような現象と闘つて行かねばならぬことは覺悟している。僕らは徒らに狂躁したくはない。思わせぶりの身振りはつつしみたい。

連載物が多かったせい、第二号は創刊号から見て格別のヴァリエテイが出たとも思われぬが、内容的な充実は感じて頂けることと思う。柳田国男先生が座談会を快諾して下さつたことは感謝に堪

えない。日本について又文化について啓発されるところが大変多かつた。

青木照夫が応召した。彼は雑誌創刊画策に當つて最も尽力を惜しまなかつた男であり、僕らは彼のドストエフスキ研究が誌面をかざるのを心待ちにしていた。今やその希望は無期延期の形だが、それは真に止むを得ない事で、僕らは改めてあちらでの大きな収穫を期待しよう。健闘を祈る。

(一九三九・一一)

*

僕らの雑誌もいよいよ三号を送ることになって、そろそろ本格的な調子も出て来たようである。このささやかな存在の意義を、結局認める人は認めるのだという不逞な自信を持つて、同人はそれぞれの仕事をやっているのだ。こう言えば或る人々には、高慢とも自尊とも聞えるかも知れない。だがこれはポオズでは無い。批評という仕事の孤独さについての、強いられた自覚に過ぎないのである。

河上さんとの一夜は、氣持のいい集まりであつた。河上さんも、こんな氣持よく話せる座談会ってないよと言つた。思うに現在、何人かの人が集まつて氣持よく話せる会合を持つということとは、それだけでも意味のあることではないかと思うのだ。僕らは、いろんな人と氣持よく話せる機会というものに、あまりに恵まれなさ過ぎはしないか、そしてそれが或る意味では文化の貧困ということと結び付いてはいしないかと思うのだ。氣持よく話せないということは、結局僕らが共通の言語・共通の關心・共通の習性の上に生活していかないということなのだ。こういった意味で、僕らは座談会に限らず、僕らが持ち得るあらゆる座談の機会というものを、豊饒な批評精神の花咲く場所として生かしたいと思つている。

中村光夫もやがて帰って来る。期待が大きいだけに中々に待遠しい。新年号には、同人全部揃って力篇を寄せる心算でいる。

伊藤信吉の「土の唄と民話」が四元社から出た。稿を改めること数回にして成ったもの。詩人にして批評家たる伊藤君の、これは望郷の歌とも言うべきものだ。また君の一つの日本論とも言えるだろう。御一読を乞う。

(一九三九・一二)

*

身辺雑事のため、先月はこの後記を伊藤君に代って貰ったが、伊藤君が同人たちのいろいろの執筆プランを紹介していたのは、読んでいて非常に楽しかった。何か澎湃としたものを感じさせた。この雑誌を長く続け且意義あらしめるためには、唯同人の熱意だけが必要なのだから、同人のそういった逞しい意欲を知ることが、僕に取って何よりのはげみにもなり、楽しい希望ともなるのだ。

伊藤君が書き洩らしたものを書いてみる。斎藤君の有島武郎・新井白石。勝見勝君の寺田寅彦論。平野君の正岡子規論。伊藤君の蒲原有明・三富朽葉論。僕の六人の私小説家論。こういったものが、今年には次々に誌上に掲載されて行く。西村君の英吉利モラリスト研究は何時まで続くか見透しもつかぬ、茫洋としたものだし、吉田・権守・寺岡・足立・富士川諸氏の訳業もすすめられて行くし、更に又帰ったばかりの中村君も、何かやり出すに決っている。こういったことを書いていると僕の胸も青年的な希望にはりつめられて来る。

今月は座談会を休んだ。別に意味はない。来月は帰って来た中村君を中心に話し合うつもりだ。それから書評欄を設けたいと思ひながら、いろんな理由で延び延びになっていたが、今月からいよいよ

確立する。書評というものの意義を今更ここに説くまでもないが、こういう雑誌でこそ、全く広告意識を離れて自由に書けるのだから、一層意義深いというものである。

戦地から青木君の便りがあった。今は或る城の中に起臥して、まだ戦争してないらしいが、相変らず飄々とした中にも誠実さの籠った手紙だった。

*

「批評」がその周囲に一つの雰囲気を作り出して来た。そしてその雰囲気と、現代のジャーナリズムというものが作り出している現実とは、遥かにかげ離れたものであることも事実だ。「批評」とはこれこれ彼様な雑誌だという先入見を以てあげつらう声をちよいちよい耳にするのだが、きき流す外手はないと思つて黙っている。我々は何も文壇の現実から抜け出て、孤高を潔しとしているものではない。唯、我々は現代ジャーナリズムの現実を、我々の現実としないだけだ。そうでなければ、凡そ僕らが雑誌をはじめすることに意義などありはしないのだ。日本の文壇にも一つぐらい、某々は最近売れ出して来たとか、某々の本は版を何回重ねたとかいう類いの話を聴くことの出来ない集りがあつてもよいのだ。そしてそういう話の出ないことが、現実から浮上っている事だなどと思つて貰いたくないものだ。

今月は又誰か一流の人を中心に座談会をやる心算だったが、都合で次号に廻すことにした。評論三篇、翻訳二篇とは少し淋しいと思うかも知れないが、どうぞおあいそはない代りに実質を取つて頂きたい。もつとも僕たちの雑誌の読者にまでジャーナリスティックな気を配る必要はないと思うけど